

2022年9月17日

第26回加藤周一文庫公開講読会

『羊の歌』 「仏文教室」 (前半)

立命館大学客員協力研究員

猪原 透

【本章の梗概】

前章では1941年12月8日、すなわち太平洋戦争開戦当日の様子が描かれたが、本章と次章ではその周辺の時期における加藤の大学生活が描かれる。次章では大学外での私的な集まりの様態と、加藤の激しい戦争批判の根源にある精神が語られるのに対して、本章では大学内での仏文研究室を中心とした交わりと、加藤が戦争批判の立場を貫くことを支えた仲間たちについて語られている。

東京帝国大学医学部に入学した加藤だが、文学への関心はやみがたく、医学部の講義のあいまに仏文科の講義にも出席するようになった。辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫、中島健蔵の講義に出席し、とくに鈴木・渡辺の学問的厳格さや実力のある学生に加藤は圧倒される。また仏文科以外の文学部の講義では吉満義彦の倫理学に出席し、カトリック神学に関する知的関心を触発される。加藤はカトリック神学の理路整然とした合理主義的体系に美しさを感じるとともに、フランス文学の読み方に大きな影響を受けることになった。

当時の仏文科には個性的な人々が集まっており、加藤はそれらの人々が集まってする雑談にも参加することができた。その場では、加藤の知る周囲の社会とは異なって、権力や多数派の意見を意識することなしに自由に意見を述べるのが可能であり、異なる意見を戦わせることを楽しむ習慣が存在していた。加藤はそうした雑談を通して仏文科の講師たちに共感し、また影響を受けたが、なかでも「戦争中の日本国に天から降ってきたような」渡辺一夫助教授からは強い影響を受けることになった。戦争中の日本社会に対する容赦仮借のない批判者であった渡辺の存在によって、加藤は自らの意見が孤立したものではないことを実感することができた。また、渡辺の16世紀研究を通して、過去のなかに現在が現れ、現在のなかに過去が見えてくるような学問があることを知った。

加藤は仏文研究室の助手・学生であった森有正・三宅徳嘉の二人とも親交を結び、彼らの知識の正確さと、戦争に対する非妥協的な態度に共感を抱いた。渡辺や森・三宅の存在は加藤が戦争批判の立場を貫くための支えであったから、大学を卒業したあとも加藤は仏文研究室を折にふれて訪ねた。この頃、加藤は三宅とともに、自身の遠縁にあたる神田楯夫のラテン語講読に出席する。加藤はそこでキケロを読み、その次にウェルギリウスを読む。連合軍のノルマンディー上陸が伝えられた日、神田は「さあ、これで、敵も味方も大変だ」「敵というのは、もちろん、ドイツのことですよ」と述べ、加藤らを呆然とさせた。

【第1段落】加藤が出席した文学部の講義（1）——仏文科の講義

①本郷の大学で、私は医学部の講義ばかりでなく、文学部の講義も聞いていた。②学校で英独語を習い、独習していくらか仏語を読めるようになってはいたけれども、私はまず一般学生のための仏語の講義に出席した。そこでは中島健蔵講師が、簡単な文法の説明をしながら、《サロメ》を読み、文法の説明が面倒なところにさしかかると、「おれにもよくわからかねえ、こんなことまで今覚えることはないだろう」などと言って、学生を笑わせていた。しかしそれは、仏語をはじめて読む学生のための講義だったので、私には少し易しすぎた。私は仏文科の他の講義にも出るようになった。辰野教授の「一九世紀文芸思潮」、鈴木助教授の「マラルメ研究」、渡辺助教授のモリス・セーヴやモンテーニュの講読……私はそういう講義に出たり、出なかつたりした。③辰野先生の講義は、歯切れのよい日本語で、耳に快く、話し手の人柄がおのずからしみ出していたから、学生をひきつけたのであろう、いつもたくさんの方が出席していて、講演会のような感じであった。④「マラルメ研究」は、途方もなく詳細であり、私の出席したときには、詩人の生涯という話の一部分で、ある年にマラルメの借りた家の家賃がいくらであったか、ということが話題であった。「いや、おどろいたね」と私はその頃仏文科の学生であった中村真一郎にいった。「文句をいうなよ、君などは運がいい方だ」と中村は答えた、「今年はとにかくマラルメの話じゃないか。考えてもみたまえ、マラルメが生まれるまでに、一年もかかったのだけ、一年も！」。⑤渡辺先生の「一六世紀文学の講読」は、現代語もろくに知らない私には、猫に小判であったにちがいない。それでも私は医学部の講義との折合いのつくかぎり、教室の後の方に坐って、三宅徳嘉のように段ちがいに学力のある学生と渡辺先生との問答を傍聴することにしていった。

①「本郷の大学で、私は……」

・加藤周一が第一高等学校を卒業したのは1939年3月。東京帝国大学医学部に入学したのは1940年4月(1943年9月に繰り上げ卒業)。一年間の空白があるのは、加藤が母の勧めに従って文学部から医学部に志望を変更したが、結果として受験に失敗し浪人したため¹。医学部への入学後も、文学への関心は継続していた。



解剖学教室での加藤（右端）²

・文学部、とくに仏文科の講義への出席にあたっては、主任教授である辰野隆の許可を得ている。辰野は父・金吾の代から加藤の父を「かかりつけ医」としており（「渋谷金王町」）、「息子が行きたいと言っていると父が話してくれた」³。

¹ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（岩波書店、2018年）479-485頁。

² 画像引用は全て、加藤周一現代思想研究センター・丸山眞男記念比較思想研究センター共同企画展示『知識人の自己形成』（<https://www.ritsumeai.ac.jp/lib/f09/040/#menu>）。

³ 加藤周一（聞き手・江藤文夫）「戦時下のある風景」（鷲巣力編『「羊の歌」余聞』筑摩書房、2011年）180頁。

②「学校で英独語を習い、独習していくらか仏語を読めるように……」

・加藤とフランス文学のかかわりについては、芥川龍之介を通したアナトール・フランスへの関心に始まり、一高時代にフランス語を自習し、片山敏彦に学んだことで様々なフランス文学を読むように。こうした加藤からすれば、一般語学は易しすぎた。

・中島の一般語学（外国語の教員無試験検定のため必修講義）は仏文科以外の学生に開放されたもの。仏文科の学生は受講しない。



③「辰野先生の講義は……」

・辰野隆（1888-1964）は、東大仏文科の最初の日本人教授（1932年～）。渡辺一夫や中島健蔵のほか、三好達治・小林秀雄など多くの文学者を育てた名伯楽として知られる。

・講義の正式な題目は『十九世紀仏蘭西文芸思潮』⁴。名講義として知られた。辰野の「歯切れのよい日本語」から受ける印象が強調される一方（辰野の語り口については「渋谷金王町」でも描かれている）、内容への言及はない。

④「マラルメ研究」は、途方もなく詳細であり……」

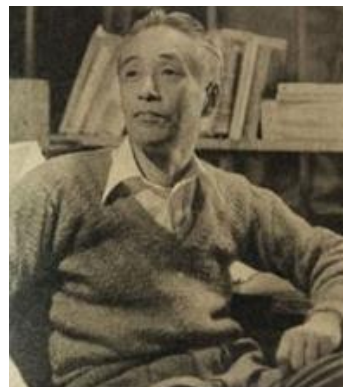
・鈴木信太郎（1895-1970）は東大仏文科で3人目の助教授（1932年～）。ステファヌ・マラルメ（1842-1898）の詩の研究で知られる。

・鈴木「マラルメ研究」については、中村真一郎が以下の様に回想している。「ここで、一単位の二時間をたっぷり使って、先生はマラルメの十四行詩一篇のテキストの決定の手順を、私たちの見たこともない、凡ゆる種類の限定版をふくめたエディションと、詩人の手書きの原稿の写真との照合によって、その句読点に至るまで実証的に追求し、それから一語ずつの解釈に入るのだが、それもまた、それぞれの語を、詩人の他の詩の中の同じ語の用例を集めて語彙を決定し、あの表面的には朦朧としているように感じられるマラルメの詩から、明快な、そして唯一の正確な姿を浮き上がらせる過程は、学問というものの厳密さを骨身に浸みとおらせてくれた」⁵



⑤「渡辺先生の一六世紀文学の講義は……」

・渡辺一夫（1901-1975）は、フランス・ルネサンス期の研究で知られる。1931年から33年までパリに留学、40年に東京帝国大学文学部講師、42年から助教授。担当講義は「仏蘭西十六世紀文学概観」と「ラブレー研究」。鈴木「マラルメ研究」とともに、学問の厳密さを加藤に印象づけた。加藤はまた、渡辺との私的な交流からも強い影響を受ける。



⁴ 『東京帝国大学学術大観 総説・文学部』（東京帝国大学、1942年）500頁。

⁵ 中村真一郎『私の履歴書』（ふらんす堂、1997年）73頁。

・モリス・セーヴ（16世紀中頃）はルネサンス期のフランスを代表する詩人、モンテーニュ（1533-1592）は宗教対立に揺れるフランスで「寛容」を説いた人物。

・講義の厳格さとともに、三宅徳嘉（1917-2003）のような実力のある学生と出会ったことで、加藤は自らのフランス文学に関する知識・読解力の不足（独習の限界）を痛感した。

【第2段落－1】加藤が出席した文学部の講義（2）——吉満義彦の倫理学

仏文科以外の文学部の講義では、①吉満義彦講師の倫理学を聞いた。それは辰野教授の弁舌とはちがう意味で、流暢な弁論であり、途方もなく長い文章を、二時間たてつづけに、後から後から繰り出して絶えまのないものであった。少し後れて教室へ入って行くと、いつもながい文章の途中であり、何分か経ってやっとその文章が終る。「……バルト的、ブルンナー的、ゴーガルテン的、弁証法的、危機的神学において、また十字架の聖ヨハネの恩寵の《夜》の、魂の慄えとの関連において、再びあらわれるのを、見た」——誰が何を見たのか、途中からではわからない。いや、はじめから聞いていても、私には何のことだか意味はほとんど全くわからなかった。②しかし私は吉満義彦著書集を読み、その次に、岩下壯一著書集を読み、カトリック神学に関心をもつようになった。しかしそのとき、どういう意味でも、私が信仰にちかづこうとしていたのではないと思う。おそらく、③日本の歴史を研究する西洋人の学者が仏教に興味をもつように、仏文学を読みはじめていた私は、カトリシズムに知的好奇心をもったのかもしれない。

①「吉満義彦講師の倫理学」

・吉満義彦（1904-1945）は戦前日本のカトリック神学者・哲学者。岩下壯一（1889-1940）およびジャック・マリタン（当時のフランスを代表するカトリック神学者）に師事。1935年から東京帝国大学倫理学科講師。中村真一郎によると、吉満の講義は「何らの妥協のない学問的なもので、聖トマス〔トマス・アクィナス〕の『神学大全』からの無数の引用を、ただ章と節の数字を挙げるだけで先へ進むので、あとでノートを整理するのに大変だった」⁶。

・カール・バルト、エミール・ブルンナー、フリードリヒ・ゴーガルテンは、いずれも弁証法神学（危機神学）を代表する第一次大戦後の神学者。

②「しかし私は吉満義彦著書集を読み、その次に、岩下壯一著書集を読み……」

・吉満義彦著書集は1947-49年の刊行、岩下壯一著書集（全集）は1962年の刊行。また別の文章では、一高時代からの友人・垣花秀武が「理路整然たるカトリック神学の、殊に岩下壯一神父の著作の理論的魅力と倫理的な深みとを教えてくれた」と語っている⁷。

・加藤周一文庫（閉架）には、以下の書籍がある。吉満義彦『死と愛と実存』（1940年）、岩下壯一『信仰の遺産』（1941年）、同『中世哲學思想史研究』（1942年）。

⁶ 中村真一郎『私の履歴書』86頁。

⁷ 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場」『「羊の歌」余聞』121頁。

・『青春ノート』には、岩下壯一訳『大思想文庫第六 アウグスチヌス神の国』(1935年)と『信仰の遺産』から抜き書きし加藤の感想を加えた「岩下師の言葉」(1942年2月)がある。また、「吉満義彦覚書」(1985年)には、吉満の著作『詩と愛と実存』を刊行当時に読んだこと、戦時下の日本主義全盛のなかで「人間性の普遍的真理」を説く吉満の文章に魅力を感じたことが記されている⁸。

③「日本の歴史を研究する西洋人の学者が仏教に興味をもつように……」

・一高時代の教師ペツォルトか(「戯画」、あるいは戦後に会う日本研究者のことを想定?)
・加藤はカトリック神学に魅力を感じつつ、亡くなる直前まで入信はしなかった。ただしカトリック神学の影響が小さかったというわけではなく、とくに敗戦からまもない時期の加藤の19世紀フランス文学論には、カトリック神学との関係を軸に文学の展開を読み解こうとする傾向が顕著であるという⁹。

【第2段落—2】加藤が出席した文学部の講義(3)——カトリシズムと仏文学

たしかにカトリシズムについてのほんのわずかな知識も、忽ち仏文学を新しい光のもとに照らし出した。④その理路整然とした合理主義的体系は、それ自身ほとんど美しかったばかりでなく、一七世紀の合理主義の由来を説明してあまりあるように思われた。⑤またペギーが情熱的に説いたように、人間の善意の努力の果てに悪が生まれるという考え方、罪の底に沈めば沈むほど救いにちかづくという逆説は、人間感情の力学のもっとも深く精巧なもののようにみえた。私は説得されなかったが、感動し、みずから信仰にちかづかなかったが、もし信仰がそのような逆説的構造を中心として成りたつものとするれば、信仰をもつ人にはそれなりの理由が充分にあるのだろうと考えた。⑥クローデルが芝居のなかで、モリヤックが小説のなかで、何を言おうとしていたのかということは、そのときはじめて、私の眼にもはっきりとみえるようになった。⑦もはやグラアム・グリーンすべての小説の主題が、たった一つしかないということ、逆にいえば、そのたった一つの主題が、小説家はその生涯をかけて展開しても尽きぬほどの可能性を包んでいたということに、疑いの余地はなかった。……「中世」についてさえも——西洋の中世史を私は知らなかったが、⑧文芸復興期に対立する「暗黒時代」を想像するよりは、むしろエティエンヌ・ジルソンの流儀に従って価値と概念の体系の豊富に展開した積極的な時代を想像したのである。⑨私のカトリシズムとのつき合いは、子供の私をおびえさせた西洋人の尼僧たちにはじまった。その後現代のトミストとカトリック作家が、大学生の私をひきつけたが、私はその間に、一度も教会へいったことがなかったし、礼拝に出たことも、説教を聞いたことも、一人の宣教師と話したこともなかった。そればかりではなく、そもそも周囲の社会に、教会のどんな影響もほとんど認め

⁸ 加藤周一「吉満義彦覚書」『加藤周一著作集』第18巻(平凡社、2010年)。

⁹ 海老坂武『加藤周一』(岩波書店、2013年)46-48頁。

ことがなかった。選挙に干渉し、大学の人事を左右し、産児制限と離婚を困難にし、隣の娘の品行を弾劾してやまない教会と教団と信者の巨大な圧力を、私は身にしみて感じたことがなかった。私はカトリシズムに一種の《プラトニック・ラブ》を抱いていたのかもしれない。一しょに住んでみれば——愛憎共に奇麗事ではすまなくなるのが、人情の自然である。

④「その理路整然とした合理主義的体系は、それ自身ほとんど美しかったばかりでなく……」

・秩序や合理性に「美」を感じるのは、加藤の美的感覚の特徴（巡洋艦の水兵たちの正確で能率的な動きにも「ほとんど美的な感動」を受けた。「美竹町の家」）

・デカルトに始まる 17 世紀合理主義哲学とカトリック神学の連続性を認識。

⑤「またペギーが情熱的に説いたように……」

・シャルル・ペギー（1873-1914）、ポール・クローデル（1868-1955）、フランソワ・モリヤック（1885-1970）はいずれもはフランスの詩人、カトリック作家。

・グレアム・グリーン（1904-1991）はイギリスの小説家で、やはりカトリックへの「回心」を経験。加藤は「グレアム・グリーンとカトリシズムの一面」（1957年）で、グリーン「支配的な主題」を解説している。それは「悪人の決して犯さない罪、または善人だけが担う地獄落ちの可能性というカトリシズムの古い逆説」である。

⇒ 善良であろうとすることが（正）、必然的に挫折と絶望を招き（反）、その限界において価値の転換が生じ心の平安を得る（合）という「逆説的構造」（弁証法的構造）。

⑥「文芸復興期に対立する「暗黒時代」を想像するよりは……」

・『続羊の歌』「中世」には、パリの景観やフランス文化の全体に「中世」が深く食い込んでいることを発見し驚く描写がある。その前提となる中世の積極的なイメージをここで形成。

・エティエンヌ・ジルソン（1884-1978）はフランスの哲学史家。中世哲学の積極的な価値と近代哲学との連続性を主張し、「暗黒の中世」に見直しを迫った。なお、『青春ノート』「絶望的なヨーロッパの話、ヒューマニズムの運命に就いて」（1941年末～42年初め）には、「ヒューマニズムがルネッサンスにはじまったと云う説は真赤な嘘だとエティエンヌ・ジルソンは云っている。マリタンも同じことを主張する。カトリシズムは、従来人の云うごとく、ヒューマニズムを拒否するものではなかったし、又ないと云うのだ」とある。

⑦「私のカトリシズムとのつき合いは……」

・「渋谷金王町」の章では、加藤の母が無視論者であった父を説得し、加藤を「カトリックの女学校の幼稚園」に通わせる話がある。しかし加藤は幼稚園になじみず、「幼稚園が私にのこしたのは、黒衣の西洋人や、礼拝堂の鐘や、俄かに校庭を埋める征服の娘たちの、異様で強烈な感覚的印象だけであった」。

・母を通して知ったカトリシズムの情緒的世界と、父を通して知った合理的・秩序的世界のあいだにある関係に気づく。ただし否定的な面をみない「プラトニック・ラブ」であった。

【第3段落】 仏文研究室の雰囲気

その頃の仏文科には個性のある人々が集っていた。辰野隆、鈴木信太郎、中島健蔵、森有正、三宅徳嘉……①講義よりも、講義のあとでそういう人々が集まってする雑談は、医学部とは全くちがう雰囲気を持ち、独特の活気にみちていた。医学部では、学生が教室以外のところで、教師と話し合う機会は、ほとんどなかった。いや、そういうことばかりでなく、②仏文科研究室の集まりには、私の知っていた周囲の社会から遠く隔った何ものかがあった。それは権力を意識することなしに、何についても、かなりの程度まで、自由に話すことができた、ということかもしれない。③辰野先生は、巻舌でまくしたて、磊落豪放という感じで、冗談をいっては人を笑わせ自分も笑っていたが、実は人の気持ちを見抜くことに敏感で、その心使いは繊細を極めていた。すべてがあまりによく見えすぎたので、相手を息苦しくさせないために、好んで冗談をいっていたとしか、思われなかったほどである。④たまたま私を見かけると、必ず「御尊父はお元気ですか」といわれた。先代以来の医者に、間接にでも、挨拶することを忘れなかったのである。④「仏文の研究室には、秀才が集まっているんですよ」ともいっていた、「渡辺とか、森とか、三宅とかね、これはみんな仏文はじまって以来の秀才だ。ぼくはわからないことは、渡辺に訊きます。何でも知らないことはないね。小林（秀雄）もよくできたが……これは渡辺とちがって、教室にちっとも出て来ない。家で本ばかり読んでいる。ぼくの家の本を持って行って、煙草の灰で汚してかえしてくるんだ。実によく勉強をしたな。試験をすると、講義に出ていないから、できませんね、それで通して下さいというのだから、ひどいものだ。卒業論文だけは書いて来て、とにかくこれを見て下さい。見ると、驚いたね。これが素晴らしい。最高点だ。渡辺・小林・森……森君はデカルトとかパスカルとかいっていてね、これがまた凄い秀才ですよ、仏文にもこういう人が出て来なくてはいけない、むずかしくて何だかよくわからないけどね……」。

①「講義よりも、講義のあとでそういう人々が集まってする雑談は……」

・教師たちと、2、3人の学生が集まって話す雑談の場に、加藤も参加。

・仏文研究室の雑談では政治的なテーマについても話し合われた。これに対し医学部では、「ファシズムに賛成もしないけれど反対もしない。技術者としての、要するに医者の話以外は何もない。話題は食べ物とかスポーツだけという感じなんですね。学外の社会に関する情報は非常に限られていた」。¹⁰

②「仏文科研究室の集まりには、私の知っていた周囲の社会から遠く隔った何ものかが……」

・太平洋戦争開戦の際、加藤が母に「勝ち目はないですね」というと、母は「そんなことを、誰にもいわない方がいいよ」と忠告。権力の定めた公式の意見（必勝の信念・絶対不敗 etc）や多数派の意見に反したことを述べるのは容易ではなかった。そしてまた、権力や多数派の見えない支持を頼んで高圧的な態度にできるものも多かった（「内科教室」）。

¹⁰ 加藤周一（聞き手・江藤文夫）「戦時下のある風景」『「羊の歌」余聞』170-171頁。

③「辰野先生は……」

・物事にこだわらない（磊落豪放）だけでなく、繊細な心遣いもある。そうした人柄を仏文研究室の面々や加藤が信頼していたため、自由に意見を述べることができた。

・加藤に対し「御尊父はお元気ですか」とあいさつしたことに触れることで、辰野の人柄を示すと同時に、加藤が仏文研究室の集まりに出入りするようになった背景を描く。

④「仏文の研究室には……」

・謙虚さ、教え子の生意気さ・行儀の悪さに対する寛容さ、「むずかしくて何だかよくわからない」研究を褒めて伸ばす姿勢など、仏文研究室の性格は辰野の人柄と不可分であった。

【第4段落】 仏文研究室の人びと (1) ——辰野隆

①仏文研究室へ戦争の情報をもって来たのは、いつも中島講師であった。汗をふきながら、疾風のようにとびこんで来て、「ぐずぐずしちゃいられねえ、おい、大変なことになったぞ……」。「ほう、そうかねえ、敵の戦艦が真二つになって、消えちまったのか」と鈴木助教授がいう。「ハワイを乗っとっちまえ、ということだ」。大さわぎをしているところへ、教室から渡辺助教授が帰って来て、②研究室に居合わせた人々は、そろって本郷通りの喫茶店「白十字」へ出かける。英文科の中野好夫助教授や倫理学科の吉満義彦講師の加わることもあった。「ハワイでゴルフをするなんてのは、痛快じゃないか」「痛快かもしれませんが」と渡辺助教授はいう、「相手の本土が無きずでしょうから、戦争はひどくなると思いますよ」「なに、こっちは絶対不敗の態勢だ」「そうあって欲しいですね」「どうもカッチャンは悲観的でいけないねえ」——というところで、③辰野教授は、大声一番、「ぼくは大東亜戦争大賛成だ」という、「ただし……」。その「ただし」の後で少し休んで、「ただし前途有為の青年を殺すのではなく、年の順に上から兵隊にとるとすればだ。参謀本部の連中とか、鈴木君やぼくのように前途無為の方から、戦場に送っちまえというのなら、ぼくは大東亜戦争大賛成だね」。④辰野先生は、いくさのはじめの頃、日本軍の大勝利をよろこんでいた。「真珠湾」は「痛快な」活劇であった。「天皇陛下」は尊ぶべきであった。しかし権力をほしいままにした軍人と軍国主義に便乗した人々の心情は、充分に見抜いていて、突然、思いがけないことを言出すことがあった。

①「仏文研究室へ戦争の情報をもって来たのは、いつも中島講師であった……」

・冒頭の文章は、太平洋戦争開戦当日の描写にも読めるが、中島健蔵が否定している。異なる日時に行われた複数の会話を織り交ぜたものか。なお、中島はこの段落について「善意にみちた」描写であり、実際には辰野・鈴木の「露骨な戦争賛成・帝国万歳の態度は到底「まじめ」とは思われず、それについては苦りきっていた」こと、正面切って反戦的言辞を述べることは渡辺一夫とのあいだでのみ可能だったと述べている¹¹。

¹¹ 中島健蔵『回想の文学 3』（平凡社、1977年）267-269頁。

②「研究室に居合わせた人々は……」

・仏文研究室の人びとのあいだで政治的な問題に関する意見が交わされ、異なる意見に対する寛容さが存在したことを示す。一方、太平洋戦争開戦当日の医学部では（『青春ノート』の記述とは異なり）「何事もなかったかのように平然として」授業が行われたとされているが、仏文研究室との対比が意識されているのかもしれない。

・白十字堂は東京帝国大学の正門前に存在した喫茶店・洋菓子店。渡辺一夫と個人的に親しかった中野好夫（「高原牧歌」にも登場）や吉満義彦もここでの集まりに参加。前章でも「本郷通りの本屋や「白十字」の窓につきはじめたタバコの灯」を好んだことが語られている。

・ここで交わされている会話は、鈴木信太郎と渡辺一夫によるものか。鈴木の良い意見に渡辺が水を差す（他の場所であれば危険な）やり取りが描かれている。

③「辰野教授は、大声一番、「ぼくは大東亜戦争大賛成だ」という……」

・実際にあった会話とみられる。歯切れのよい江戸弁で、落語的なユーモアのあることを言う辰野。後述するように戦争にはおおよそ肯定的であった辰野だが、時に意外なかたちで軍人を批判し加藤らを驚かせた。

・ただしその真意（戦争に対する態度）は読み取りにくい。この点は、つぎの段落の中島健蔵とは対照的。

④「辰野先生は、いくさのはじめの頃……」

・前章で真珠湾攻撃について「ぼくは愉快だね」といった大学教授は辰野か。

・父との関係もあって加藤は辰野に親しみを感じるとともに、「自分たちが近代日本を作った」という気概をもつ明治人の典型を辰野のなかに見ていた。「天皇崇拝者でしたが、本当に崇拝していたかどうかわからない。明治が作り出した日本人です。〔中略〕漱石からずっと繋がっているものがあつた。漱石も落語が好きだったけれども、辰野さんにも落語的ユーモアがあつた。そういう人がいなくなりましたね」¹²

・なお、敗戦から間もない時期の日記（『JOURNAL INTIME 1948 1949』）では、加藤もまた辰野の戦争への態度を苦々しく見ていたことがうかがえる。

¹² 加藤周一（聞き手・江藤文夫）「戦時下のある風景」『「羊の歌」余聞』184頁。

【第5パラグラフ】 仏文研究室の人びと (2) ——中島健蔵

①私はまた中島講師の人柄を好んでいた。決して陰険な策をめぐらさない人であり、私のような青二才を相手にしても、対等に接して、飾らず、かくさず、忽ちうちとけた空気をつくりだすことのできる人であった。②ありとあらゆることに興味をもち、現代音楽に凝るかと思えば、自動自転車の発動機を組み立て、天下国家を語るかと思えば、生理学会の最近の動向を論じ、大学ではフランス象徴主義を講じながら、数限りない委員会や組織に活躍し、現れたと見るまに消え、消えたかと思ううちに悠々と談じていて、たえず東京中をかけめぐりながら疲れを知らぬようにみえた。しかしそのどれ一つとして、一身上の利益を目的としたものではなかった。③何をしているのか、よくわからなかったが、何故そうしているのかは、実によくわかった。私はその忙しさに驚き呆れ、その心の——何といたらよいか、一種の質に、共感を覚えていた。

①「私はまた中島講師の人柄を好んでいた……」

・中島健蔵（1903-1979）は、フランス文学者・文芸評論家。1934年から東京帝国大学仏文科講師。当時から文壇で活躍。戦後に日中文化交流協会の理事長となり、『羊の歌』刊行後に加藤を中国へと連れていく。中島への追悼文では「私心私欲なく、党利党略なく、多方面に活躍した中島さんのなかには、いつも一人の詩人が住んでいたのだろう」と述べている¹³。
・ただし当時、加藤とどのような交流があったかはよくわからない。太平洋戦争の開戦後まもなく中島は徴用され、マレー・シンガポールに送られている。

②「ありとあらゆることに興味をもち……」

・中島はクラシック音楽に造詣が深く、当時からレコードの収集家として知られていた¹⁴。1982年から2009年までは中島健蔵音楽賞が存在したほど。
・30年代半ば～40年代までに中島が何らかのかかわりを持っていた団体は、昭和研究会、国策研究座談会、農山村文化協会講演会、文芸中央会、文芸者会、日本ペン倶楽部、日本編集者会、東亜新秩序研究会など。こうした多くの組織を通して中島は戦争へと向かう日本社会に深く関わったが、（時局に便乗した人々とは異なり）一身上の利益を目的としない純粹さに加藤は共感。

③「何をしているのか、よくわからなかったが、何故そうしているのかは……」

・前パラグラフの辰野隆（何を言っているのかはよくわかるが、その真意はうかがい知れない）とは対照的な印象。

¹³ 加藤周一「誄」鷲巣力編『称えることば 悼むことば』（西田書店、2019年）107頁。

¹⁴ 中村真一郎「私の履歴書」79-80頁。